

黙示録2章1-7節 「愛から離れた教会」

1A 中心におられる方 1

2A 労苦と忍耐 2-3

3A 置き去りにされた愛 4-5

4A 勝利ある者 6-7

本文

黙示録 2 章を開いてください。これから、主イエス様が、使徒ヨハネに対して七つの教会に対して、それぞれに使信を語られます。黙示録は、ご自身が天に昇られてから 65 年ぐらい経った後で、主を証言した生き残り使徒ヨハネに対して、語られた言葉です。

そしてこれから、私たちは七つの教会に対する、主ご自身の言葉を見ていきます。これは、とても緊張する使信です。なぜなら、これらは当時の小アジアにある教会のみならず、「七」という数字が表しているように、諸教会全体に対して残された言葉であるからです。主は、黙示録をもってご自身の預言を完成されたことをこの書の最後に語っておられます。花婿なるキリストが教会のために戻られるにあたって、60 年以上、そのお姿を示していないゆえ、また迫害が厳しくなっているローマの時代に、警告と励ましの言葉を与えておられます。ですから、終わりの日に生きる私たちキリスト者の、この小さな群れにも、主は御霊によって生きた言葉として、語ってくださいます。

1A 中心におられる方 1

1 エペソにある教会の御使いに書き送れ。『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。



初めに主が語られているのは、「エペソにある教会」です。主がヨハネに語られている、パトモス島から最も近いところにある、港町です。ここは、「アジアの中心地」と呼ばれた、ローマ帝国の中でも突出した町でした。ちょうど今でいうなら、ニューヨークのような存在です。アジアからの隊商ルートの端にある、誇り高い、裕福で、活気のある港を有していました。そこには、2万5千人を収容する

劇場がありました(使徒 19:29)。アゴラと呼ばれる広場があり、そこが中心的なところでした。商

品の市場もあれば、また思想を表現する所もありました。また有名な「ケルスス図書館」もあります。

しかし、ローマ帝国の他の大都市にもある、大きな問題がキリスト者にはありました。非常に異教的だ、ということです。アルテミスという豊穡の女神が祀られている、「アルテミス神殿」は、世界の七不思議の中に入れてられています。数多くの柱があり、そして奥にアルテミスが祀られています。その偶像たるや、胸のあたりに数多くの乳房がぶらさがっている、非常に卑猥、奇妙なものであります。けれども、アルテミス信仰は根強い人気があり、参拝客は絶えませんでした。そこで商売も行なわれ、パウロがそこで宣教していた時に、信じた人々は偶像を捨てていったので、商売あがったりで、それで騒動が起こったほどです。そして、そこは性的な乱れが当たり前のようになっていました。そこにいる巫女、女祭司は事実上の売春婦でした。そして、アルテミスのお祭りが例年行なわれていましたが、その時は乱痴気騒ぎが起こります。そしてそのそばには遊郭があります。売春宿ですが、それが大通りの中心部のところに堂々と立っています。そんな中に、キリストの教会が生まれたのです。

そしてローマには、皇帝礼拝がありました。ローマ帝国を一つに治めるために、その統合の象徴として皇帝を主として、救い主として信じる信仰を養っていました。アゴラに入る所には、皇帝を神として捧げるための香を焚く場があり、そこで焼香を済ませてから中に入ることができます。これまた、キリスト者にとっては大きな試練だったでしょう。そして皇帝に礼拝を捧げないものなら非国民扱いされ、それで 12 節以降にあるペルガモにある教会では、殉教者も出ています。この日本も過去に、天皇を拝まないものなら犯罪とされた時代がありましたし、そうでなくとも、檀家制度があって焼香をたかないことによって、家から排斥される圧迫があります。ですから、状況は我々、この日本、そして大都会、東京に住んでいる者たちにも身に迫るものがあるのです。

しかし、キリスト者はそんななかで信仰と希望によって支えられ、またキリストの愛に満たされて世に対して証しをしていました。ローマには恐ろしい慣わしがありました。ごみ収集所に、生まれたばかりの赤ん坊を日差しに晒して、そのまま捨てて良いという法律がありました。今は、それが中絶という名でまかり通っていますが、当時はもっとグロテスクであります。特に、アルテミス神殿で商売をしている巫女たちは望まぬ妊娠をしたら、ここに赤ん坊を捨てていました。しかし、そんなところにやってきて赤ん坊を救い出していたのは、キリスト者たちです。イエス様は、「マルコ 9:42 また、わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにでもつまずきを与えるような者は、むしろ大きい石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。」と言われました。そして、ご自分はいのちなる方です。ですから、キリスト者はキリストに倣う者として、異教徒たちが捨てているその赤ん坊を救出する働きをしていました。

また、悪霊の生きている場所もありました。また別の神殿ですが、そこで悪霊を呼び寄せる場所があり、オカルトが流行っていました。ですから、パウロが福音宣教をしていた時に、悪霊追い出しの記述が、使徒 19 章にあります。そして、魔術を行っていた者たちが書物を焼き捨てたことも

書かれています。それでエペソの教会に対してのパウロの手紙には、霊の戦いとして、悪霊どもが空中にいることを生々しく描いているのです。

そのエペソに、強い教会が建て上げられたことは、以前、私たちが使徒の働き 20 章を読んだ時に学んだことであります。使徒 18 章には、パウロが短期でここを訪問し、福音宣教をしました。そしてアポロが来て、そのアポロをアクラとプリスキラが教えました。そしてパウロが、アポロによって教えられた 12 人の弟子に出くわし、彼らがイエスの御名によってバプテスマを受け、また聖霊の賜物も受けました。そして驚くべき業が行なわれます。パウロは、ローマに捕えられた時に、エペソにいる兄弟たちに対して、彼らの持っている霊的豊かさ、キリストにある神の祝福がいかにすぐれているかを、エペソ人への手紙で書き記しました。

パウロはエルサレムに行く途中で、そこの長老たちを呼び寄せ、最後の言葉を語りました。「使徒 20:27-30 私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中にはいり込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。」このように、偽教師たちが教会から出てくるということ、それを彼は予告しました。果たして、そうした者たちがやってきて大変なことになっていたことが、次の牧会者テモテが対処したことで分かります。テモテへの手紙第一と第二には、違ったことを教えて論争をしかけている者たちがいて、信仰から離れてしまった者たちの姿があります。

ですからエペソにある教会は、パウロが教会開拓をして、そしてテモテに引き継がれたところにあります。そしてさらに、使徒ヨハネに任されたことが聖書ではないですが、他の文献で明らかにされています。したがって、パウロ、テモテ、そしてヨハネによって牧会を受けた、筋金入りの教会でした。信者たちは、大きな試練と戦いを内外に受けていたけれども、それにまさる励ましと健全な教えを、しっかりと持っていた教会だったのです。そのような中で、主が与えられた言葉です。

ここに、「右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。」とあります。これから主が語られること、エペソにある教会で語られることは、「主の名のためにしっかりと働き、労苦しているのに、初めの愛から離れてしまった。」という問題です。主のために働くこと、忍耐して、しっかりと主の名を守ること自体は、とても大切なものです。しかし、最も大切なこと、主との愛、この方に愛されていること、そしてこの方を心を尽くして愛するという愛の関係を蔑ろにした問題があります。このことを主が語られるのですが、主はご自身を、「右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方」と言われます。これは、主がヨハネに現れた時の栄光のお姿の一部ですね(1:12,16)。金の燭台とは教会のことであり、その間を歩いておられます。そして星は、それぞれの教会に遣わされている御使いです。それを掌握しておられる姿を示しています。

つまり、ここではっきりしていることは、私たちがこのイエス様から目を離してしまっている時に、最も大切な、初めの愛を見失ってしまっているということです。私たちは一昨日、礼拝において、天を国籍としている者たちについて学びました。そして天につながっていること、そこを国籍としていることを自由に表現できるのは、紛れもなく礼拝そのものであることを学びました。主なる神をその栄光のままあがめ、この方の恵みと憐れみを知り、この方の前にひれ伏して、心からの賛美と礼拝を捧げます。その関係の中にこそ、私たちは自由にされているということを学びました。ところが、他にいろいろな、いわゆる「大事なこと」が入ってきます。それで、それに取り組んでいるうちに、最も大切なことを置き去りにしまっていることが起こります。優先順位がいかにかつ大切かということです。燭台の間を歩かれているように、イエス様が全ての中心です。この方が全てです。そして、右の手の中に星を握っておられるように、イエス様が教会を掌握しておられます。

2A 労苦と忍耐 2-3

2 「わたしは、あなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。3 あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。

イエス様は、「あなたの行ない」を知っているとされます。これは、主に仕えて行こう、従っていこうとしているキリスト者にとっては、深い慰めを得ます。私たちは主イエスに仕えています。他の人からは評価されず、見られていないかもしれません。しかし主は、知っておられます。迫害の中にあつたヘブル人の信者に、ヘブル書の著者はこう言いました。「ヘブル 6:10 神は正しい方であつて、あなたがたの行ないを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです。」そして、「あなたの労苦と忍耐を知っている」とされます。「労苦」とは、「まさに力尽きて倒れんとするばかりの働き」という意味のギリシヤ語が使われています。そして、「忍耐」は、「不動の持久力」を意味します。いろいろな困難があつても、それをしっかり受け止めて、そこにある恵みによって強くされて、神に栄光を帰します。

そして、「あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。」とされます。ここの「悪い者たち」とは、おそらく偶像礼拝や不品行、異教的なものを受け入れてしまっている者たちのことを指しているのでしょう。そしてエペソにある教会で最も厄介だったのが、偽使徒であります。先にパウロが警告し、テモテが対処した、あの偽教師たちであります。これを見抜く時には、とても辛い作業をとおります。なぜなら、全ての人が気づいているわけではないからです。そのことを語るや、「なぜあなたは、そうやって人を裁くのですか？」と責められます。また、本当は悪が入り込んでいるのに、まるで善人であるかのようにふるまっているので、その悪を明らかにする人は悪人にされていきます。そうやって、互いの間に不信をおこし、そして分裂を引き起こします。これこそが、悪魔の策略であり、偽教師たちの意図していることです。しかし主は、そのような者たちが予め現れることを知

っておられて、「マタイ 7:15 にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。」と言われるのです。

そして、「あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。」と主は言われます。このように献身的に働き、悪や偽物にも対処して、それで主の名を保ったことについては、主は慰労の言葉、励ましの言葉をかけておられるのです。「1コリント 15:58 ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあつてむだでないことを知っているのですから。」多くを勞し、多くを耐え忍び、そして悪を見分けるというきつい作業を行ないました。

3A 置き去りにされた愛 4-5

4 しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。

主が、非難しておられます。私たちが当時の世界にいるならば、これは驚くべき、主の叱責の言葉であつたに違いありません。パウロが開拓した教会、テモテが強く対処し、そしてヨハネがその後も牧会した教会であります。そこには、しっかりとした靈的な遺産の積み上げがあり、そして使徒たちの教えの継承がありました。どこから見ても、「健全で、しっかりとした教会」であります。しかし欠けたところがありました、それが「初めの愛」です。

初めの愛とは何か？同じヨハネが、似たような時期に書いた手紙の中で、しっかりと説明しています。「1ヨハネ 4:9-13 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。愛する者たち。神がこれほどまでに私たちが愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。いまだかつて、だれも神を見た者はありません。もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。神は私たちに御霊を与えてくださいました。それによって、私たちが神のうちにおり、神も私たちのうちにおられることがわかります。」キリストが、ご自分の体を罪のためのいけにえとして捧げてくださったこと、そこに神の愛があります。そして、その神の愛にとどまって、私たちが互いに愛することです。そのことのために、主は御霊を私たちに下さいました。パウロも、エペソ人への手紙で、愛については多くを語りました。「愛」は 35 回も出てきます。愛にあふれていた教会であつたのですが、そこから離れてしまったのです。

ここの箇所から説教で興味深い例えを、ある韓国人の牧師さんがしてくれました。東洋人ならではの喩えですが、「私たちが包丁を研ぐときに、片面だけを研いだら、包丁がだめになってしまう。両面を研いで初めて包丁が使える。」ということです。つまり、主の愛の中に満たされ、その中に生きる。そして、主に我が身をお捧げして奉仕をする。この流れの中に留まることが大事なのですが、

一つのことに専念しているうちに、肝心要の、主イエス様ご自身が全ての中心であること、また、主が全ての事を掌握しておられることを忘れてしまいます。

一昨日の礼拝でお話したように、私たちは立ち止まって、主を本当に礼拝する必要があります。行事や活動をこなす対象ではなく、日々、主の前に出ていく時、デボーションをする時、そして集まって公に主をあがめ、信仰を告白し、御言葉を聞く時に、私たちは真実な意味で「働きをやめる」つまり、安息を取ることができます。私たちは、忙しく活動している中で、すぐそばにいるのに、心が離れていってしまうことがあるでしょう。それは、「自分のしていること」が、「相手あつての関係」を優先してしまうからですね。それが主に対しても起こってしまいます。主のために働いているのに、いつの間にか主ご自身との心の通い合いがなくなってしまいます。何かしている「事」が優先してしまい、イエス様の命令である、「わたしを愛しますか」という愛がおざなりにされています。

「何かをする」ことではなくて、「留まること」「一緒にいること」がもっと大切です。イエス様は言われました。「ヨハネ 15:5 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」私には懐かしい思い出があります。カルバリーチャペル所沢に、教会が始まってから二年間、そこで奉仕をしました。水曜日に、「スタッフ・ミーティング」がありました。少し賛美して、御言葉を分かち合うのですが、その後は、なぜか「食べに行こう」と言われて、食べ放題のところたくさん食べる。次に、「風呂に行こう」ということで健康ランドに行く。「ミーティング」なんだから、何か教会のことで、その運営で大事なことを離すんじゃないの？って思ったのですが、それらしきことはしないのです！私は何が何だか分からないまま、そこで奉仕していました。そしてずっと後に、尋ねたんです。「交わりが大事でしょ？」との答えでした。何をするか？ではなくて、一緒にいること、そのものが大事なのだということです。

5 それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。

主が悔い改めを呼びかけています。「あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。」ということです。私たちが、主を神とする礼拝から離れてしまっているとき、何か行なうことが第一となってしまう時に、主との関係、また互いの関係の中でずれが起こっています。それが、「どこから落ちたかを思い出す」という行為です。先週の奥多摩のリトリートでは、聖餐式の前に、「互いの間に何か祈れなくさせているような、心のわだかまりを残していないでしょうか。それを主によって取り除いていただきましょう。」という勧めがありました。リトリートでは、各メッセージの後に必ず、二人、三人で心を明かして祈り合う時がありました。それも、自分の弱いところ、本当のところも明かして、その痛みや肉の弱さもしてもらい、聖霊の助けによって祈り合うのです。その後で最後に、聖餐式での勧めがありました。主の愛以上に、何か他のことをす

るのに忙しくなっていれば、当然、他の兄弟に対する思いも正されることはありません。そしてただ活動だけが続きます。主はこのことを悔い改めなさい、と言われます。

そして、「初めの行ない」というのは、主の愛に基づく行ないです。主が愛されたのだから、主の戒めに従い、主の命令に従うのだから、兄弟を愛する、という行ないです。ここの「初めの」という言葉は順番というより優先順位ですね。「第一の行ない」といってもよいでしょう。主を愛する行ない、兄弟を愛する行ない、ということです。そして悔い改めが必要です、「悔い改め」とは「思いを変える」ことです。自分が情性で行なっていること、習慣になっていることを行なっている、そのやり方をしっかりと思い直す必要があるのです。

そして警告が恐ろしいです。「悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。」とのことです。主がその教会になくなる、ということです。初めの愛のない教会に、主は住まわれません。一昨日のエゼキエル書の学びで、11章でエルサレムにいることは鍋であり、私たちは肉だという言葉がありました。教会というところにおいて、それで自分は教会に集っているから安心だ、ということではないのだ、ということです。その中でイエス様がいなくなる、栄光が見えなくなるということは、十分あるのです。

しかも、「わたしは、あなたのところに行って」という言葉には、ギリシヤ語で「すぐに」という言葉が入ります。ですから、「わたしは、すみやかに来る」と訳すことのできる言葉なのです。つまり、主は愛のない教会については、速やかにその教会を無くしてしまう、ということです。今日の教会の中でも、カルト化した教会が、その社会問題が発覚して、たちまち戸が閉じられるということがあります。それまでは、キリスト教系の新聞に掲載されるような活発に見える教会であるにも、関わらずです。また、主が教会のために戻って来られる時にも、携挙の時にも、盗人のように来られるということも含むでしょう。その時に、教会だとされていたものが、実は教会ではなかったことが、教会の形を無くしてしまう、ということでもあります。つまり、それだけ深刻なことだ、ということです。私たちが健全な恐れを主に対して抱き、それで主の愛の中に戻ることができますように。

ところで教会史においては、エペソの人々が悔い改めたことが記録として残っています。イグナティオスという初代教父が、エペソの人たちについて、こう話しました。「最も聖なるエペソの教会、名が知られ、世界に尊ばれているあなた方、聖霊に満たされて、肉に従って行わず、全てを御霊によって行なっている方々」と書いています。

4A 勝利ある者 6-7

6 しかし、あなたにはこのことがある。あなたはニコライ派の人々の行ないを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる。

主は、エペソの人たちの行ないを再びほめています。初めの愛から離れてしまったことについて

は叱責されましたが、「ニコライ派の人々の行ないを憎んでいる」ことについては、ほめておられません。主も、その行ないを憎んでおられるからです。私たちは憎んでいる主の心をあまり想像できないかもしれませんが、けれども主は人を愛されていますが、そのしていることが悪であれば、その行ないを憎まれています。

「ニコライ派の人々の行ない」とは何か？ペルガモの教会への主の言葉が、「バラムの教え」と共に語られていることがあります。そこでは、偶像礼拝と不品行が書かれています。つまり、こうした異教的なことをしていてもよいのだ、とする、容認する教えがニコライ派であったと考えられます。先に申し上げたように、エペソは非常に異教的な、不道德な町でした。パウロが、エペソ人への手紙でこう言っています。「4:17-20 そこで私は、主にあつて言明し、おごそかに勧めます。もはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行ないをむさぼるようになっていきます。しかし、あなたがたはキリストのことを、このようには学びませんでした。」

ニコライ派は、その名前から、「征服」と「人々」の合成語なので、霊的な階級を付けていたのではないか？という考えもあります。それも有り得るでしょう、霊的な階級を付け、指導者が上に立ち、それで悪を行なうことができるようにした、責任を取らない教えを持ち込んでいたかもしれません。しかしヨハネはきっちりと、「私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり」と言いました。

7 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の實を食べさせよう。』

主は、七つの教会全てに、「御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」とされています。つまり、エペソだけでなく全世界の教会に普遍的な言葉として教えておられるのです。それから、「勝利を得る者」の約束も、それぞれの教会に与えておられます。勝利を得る者とは、エリートの聖徒ではなく、とても単純な意味です。ヨハネは第一の手紙で、こう話しました。「5:4-5 なぜなら、神によって生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。」やはり、主を信じていて、その愛の中に留まっていること、この単純な真理にいたることこそが、世に勝利を与えます。

そして約束がありますが、それぞれの教会で、黙示録 21 章にある新しいエルサレム、または 20 章にある千年間のキリストとの統治、千年王国における約束のどちらかが与えられています。ここでは、新しいエルサレムにある、生ける川のそばに植えられている、いのちの木です。ニコライ派の行ないは死をもたらしますが、主が永遠のいのちを、それを憎む者たちに約束してくださっている、ということです。